

# 若手中心 祭りに新風

**中村・烏森天神社 松蔭高和太鼓部も協力**

秋祭りシーズン最盛期。屋台におみこしと樂しみは多いが、運営する地元町内会などの役員の労力は大きい。高齢化で祭り自体を中止する地域もある中、中村区烏森町の烏森天神社の秋祭りでは、若手が中心となり、伝統に新たな彩りを加えた。大役を務めた若者たちは声をそろえる。「ふるさとに祭りがあつて良かった」

(安藤孝憲)



和太鼓などの演奏で山車の巡行を盛り上げる松陰高生ら=中村区烏森町で



同級生の安井さんがデザインしたほんてんを着てみたらし団子を焼く坪井さん(右)=中村区烏森町の烏森天神社で

ろから準備を始め、まづ身近な知人に協力を仰いだ。卒業生の一人が松蔭高の生徒らと縁を開けた。

快晴で迎えた連休最終日の十日。午前八時半、烏森天神社南町神楽会の会長、篠田道昭さん(四九)は、境内で若者らと円陣を組んだ。

「今日一日よろしくお願いします!」。担ぎ手不足で四年間途切れ

ていた山車巡行の出発を前に、気合を入れた。そこののはんてん姿は、すぐ近くの松蔭高校和太鼓部の部員たち。演奏会などで一番忙しい時期にもかかわらず、全部員五十四人が協力を買って出た。全国大会にも出た実力の演奏を、境内や巡回先の各家庭の前で披露

番を失い、ほこりをかぶっていた。「これではだめだ」。たまたま同時期に役員の順が回ってきた二人は昨年ご

一年にとって、神社は一番の遊び場だった。隠れんばに、サッカー。「思い出深い神社に恩返しができることがうれしい」と、額に汗を浮かべて笑った。

祭りは例年にないにぎわいで、初の試みは成功を収めた。ただ「続けていくことこそ大変」と安井さん。この日が、新しい伝統のスタートだと考えてい

した。ともに会社員で鳥森町に住む篠田さんと義理の兄・安井哲也さん(四八)は、祭りが衰退していのが気がかりだった。鳥森町は近くの八田駅が総合駅になり、新たに移り住む人も多い。人は増えても住民のつながりが薄く、祭りの役員も「回ってきてほしくない」と敬遠されがちだ。郷土の自慢だったはずの黄金色の山車も出

んてんのデザインを担当。幼なじみで三重大学院生の坪井佑磨さんは、飲食店でのアルバイト経験を生かし、炭火でアユや団子を焼いて来場者に振る舞った。

二人にとって、神社は一番の遊び場だった。隠れんばに、サッカー。「思い出深い神社に恩返しができることがうれしい」と、額に汗を浮かべて笑った。